

佐竹徳語録

奥入瀬を描き始めたのは、美校出の友人が奥入瀬の四季を見事に短歌にして謳いこんだのに感心したのです。矢も楯もたまらず絵具を抱えて、新緑の奥入瀬に乗り込みました。…自分にとっては厳しい寒さとともにある奥入瀬の風景が体質的に適っていたように思います。

新芽の鮮やかな緑が、身体の中にしみ通るかと思う程の新緑の奥入瀬を描いて、それを紀元二千六百年奉祝美術展(昭和15年)に出品しました。この作品は藤島(武二)先生の隣に並べられ、その上、金山(平三)先生と僕の絵を宮内省が買い上げてくれたんです。最高の榮譽でした。

金山先生と旅行をするようになって…夜、十和田でストーブにあたりながら、先生が色々な思い出話をされるんです。ある時「佐竹君、こんなことがあったね」と、帝展での僕の2点入選(大正9年)のことを話されるんです…。帝展は1人2点ずつ出品できるけど、1点しか採らない慣習がありました。「御蔭様で2点入選しました」と藤島先生に挨拶に行ったら「よかったね」と。しばらくして「絵の様子が違っていただけ、違う作家だと思ったんだろう」と言われるんです。金山先生にそう話したら、「それは藤島先生とほけたんだよ。僕は、この絵だったら2点通せと頑固に言ったんだ」と言われました。

そこの溪流は金山先生の絵のようにスーッと流れていないんです。大小の岩があって、水がかくれている、現れたり、盛んに泡立って、岸辺のところは水が浅くザーと流れているんです。僕はそれに惹かれたのに、先生はスーッと描いてしまわれた。

僕は長い間、十和田を描きに行っていました。鎌田露山(俳人：1891-1966)という人にお世話になった。「先生が十和田を描いて、たとえ一枚でもいい絵を描いて下さればそれで私は満足なんです」というような人でした。

知人の青山兵吉君の絵を見に行き、近くで見つけた納屋です。《境》という画題は、洪自誠の著書である『菜根譚』の中の言葉「境を借りて塵心をととのえる」からとりました。

今、大原美術館に収められているピサロの《林檎採り》(昭和16年大原美術館購入)という作品を東京から京都まで見に行きました。そして僕はしつこくしがみつくように見ました。それから僕の絵が変わったのです。画面が点描で見事に埋め尽くされている絵ですが、それだけを真似してみようと思いました。しかし、幾ら絵具を重ねても、点描があんなに綺麗につかないのです。これはただごとではないと思いました。…それ以来、僕の頭の中からピサロが抜けません…。

ピサロ、セザンヌら、あの時代の画家はみな宗教の上にあります。みな祈りの姿勢です。私にはそう思われるのです。が、美術評論家は誰も、それに触れておりません。ピサロとセザンヌのふれあい

もキリストの心の通っているふれあいです。ピサロはセザンヌにすべてを与えたんです。単なる画家というだけではありません。

僕がオリーブに惹かれるというのは、やはりセザンヌの絵を見ていて、緑が違うと思ったからでしょうね。赤い土とオリーブの青味の勝った緑…。ここ(牛窓)も赤い土です。永年求めたものにここでぶつかったのです。神様が与えてくれたのでしょうか。でも、まだまだうまく描けません。今度はつかめたかと思ってもまた逃げてしまう。一生こんなこと言っているんでしょうね(笑)。

私は樹木の剪定など人間の手を加えたものは好みません。自然の姿に帰るまで、2、3年かかりますが、それまで待ちます。

僕はオリーブを描きながら、自然の秩序の組み立てを教えてもらっているのです。太陽が照って色彩を与えてくれるが、太陽が動き、日が翳ると刻々と色や形が変化してゆく。そしてオリーブの樹が育てば、また新たな秩序で自然が再構成されてゆく。だから一日中描き続けることができないし、勉強することが数限りなくあるのです。

絵には組み立て、姿、形、色があるだけで、風景も静物ありません。…30年牛窓で描いていてもまだ結論が出ない。神様が造った秩序を絵の中で組み立て直そうという大それたことを僕はやっています。

自分の絵をいい絵だと思ったことはありません。ですから片っ端から絵を焼いてしまいました。より前に進むには身軽になったほうが良いのです。

キリストの愛の奉仕を、一人一人がキリストになって自分で出来ることで実践すればいいと思います。さしずめ僕は絵を描くことでキリストの道を僕なりに実践しているのだと思っています。…それにしても僕はいろんな人に随分と助けられました。

風景とか人物とか、僕はそんな区別はないんだな。僕などなんでも美しく感じてしまうし、偏ることがないです。僕はベートーヴェンも何も知らないけれど、音楽を聴いているとそういう風に思えてくるんです。…ひとつの音がフォルテ、ピアノにシモになるんだ。どこまでもひとつの存在したもので、それが良い具合にハーモニーしてシンフォニーになったりする訳で、これは絵でも基本です。

仏師が魂を込めて作ったものには誰もが心を打たれ、自然に手を合わせます。誰が作ったものかわからなくても良い。自分もそのように、片隅にあってもその置かれたところで人々に喜ばれるような絵を描きたいのです。

出典

- 雑誌『繪』《金山平三先生の思い出、など》上・下 1983年6・7月号
- 雑誌『繪』《佐竹徳画伯に聞く…牛窓のオリーブと潮香のなかで》前・後編 1987年11・12月号
- 『佐竹徳展』1987年 日動画廊図録《ひたむきな空間の表現探求と70年の画業》安井収蔵